

父親とのアタッチメントスタイルが 大学生の援助要請スタイルに及ぼす影響

島崎 姫乃¹ 菊池 春樹²

要 約

【目的】 Bowlby(1969/1982 数井・遠藤, 2005) はアタッチメントを“危機的な状況に際して、あるいは潜在的な危機に備えて特定の他者との近接を求め、これを維持しようとする傾性である”としている。そしてこのアタッチメント理論は、パーソナリティの生涯発達理論として提唱され(遠藤, 2010), そこでアタッチメントは発達に伴い養育者への近接から表象的近接へと切り替わるとされている。そして青年期や成人期のアタッチメントが対人関係にどのように影響するかの知見が蓄積されてきている。これらのアタッチメント研究における養育者は母親であることがほとんどであったが、複数のアタッチメント対象の存在が1人のアタッチメント対象との分離や喪失の反応を緩和する要因となることが提唱され、もう一人の親である父親をアタッチメント対象とした研究も増えている。しかし、青年期における父親とのアタッチメント関係がどのようなもので、人間関係にどのように影響するかは明らかとなっていない。そこで本研究では青年期の父親とのアタッチメント関係を把握し対人関係への影響力として援助要請をとりあげ、その影響力を検討することを目的とした。

【方法】 援助要請尺度・アタッチメントスタイル尺度(ECR-GO 父親を想定して回答)・アタッチメント機能尺度(利用可能性としての父親と母親の比較)の調査に参加した大学生246名のデータを分析に使用した。

【結果と考察】 援助要請得点から自立型・過剰型・回避型に分類し、ECR-GO得点から父親とのアタッチメントスタイルを安定型・拒絶型・とらわれ型・恐れ型に分類した。アタッチメントスタイルと援助要請スタイルの人数比率の偏りを検討するために残差分析を行った。全体におけるアタッチメントスタイル安定型は援助要請自立型の占める割合が有意に高く、回避型の占める割合が有意に低い結果が得られた。この結果から父親とのアタッチメントスタイルが安定していると、現在の援助要請スタイル自立型に影響することが示された。

キーワード：アタッチメントスタイル, 援助要請スタイル, 父子関係, ECR-GO, 複数のアタッチメント対象

問題と目的

Bowlby(1969/1982 数井・遠藤, 2005) は、アタッチメントを“危機的な状況に際して、あるいは潜在的な危機に備えて、特定の他者との近接を求め、またこれを維持しようとする傾性”と示した。さらに、特定の他者との近接関係の確立・維持を通して自らが安全であるという感覚を確保しようとする本能から形成されるとの考えを示した。アタッチメント理論は、人の揺りかごから墓場までのパーソナリティの生涯発達を理解するための総合理論であり、乳幼児期にアタッチメントが安定した子どもは、生涯を通じて、自己評価や情緒的健康度が高く、より従順でポジティブな情動

表出が多いこと、アタッチメントの不安定な子どもと比較して、自他の心の理解の発達が早いこと、よって、良好な対人関係に関連していくことなどが分かっている(遠藤, 2010)。生涯発達をアタッチメントの観点で具体的に概観すると、幼児期において、母子間のアタッチメントが安定型であった場合、クラスメイトに好かれ、アンビバレント型の子どもよりも社会参加と社会的権威が高く、回避型の子どもよりもネガティブな情動が少ないことが示されている。児童期においては、アタッチメントが不安定であった子どもよりもアタッチメントが安定的な子どもは、親密な友人関係を作るための能力が高い(数井・遠藤, 2005)。Kerns(2008)によれば、児童期における子どもは、仲間らと親密な対人関係を大きく拡張させ、また状況に応じて異なる対象を安全基地として受け入れることができるようになるにも関わらず、主要なアタッチメント対

1 東京成徳大学大学院心理学研究科

2 東京成徳大学

象は依然として養育者のままであり、その養育者の利用可能性の覚知に関しては高く維持されることを見出した。その後、特に児童期後期から青年期前期にかけて養育者に対して徐々に回避的な態度をとる傾向が強まり、心理行動的独立性の高まりが見られる。青年期や成人期のアタッチメントが親子関係、友人関係、恋愛関係などの対人関係にいかなる性質があり、どのように影響するのか知見が蓄積されてきている。

これまでのアタッチメント研究は子どもとその母親が対象となっていることがほとんどであった。しかし、近年、女性の社会進出や核家族化による家事の分業が進むにつれて、主な養育者は母親だけでなく、もう一人の親である父親をアタッチメント対象とした研究も増えはじめている。例えば、ラム(1977 尾形, 1995)は、父親に対しても、母親に対してと同じようにアタッチメントを形成して偏りがなかったこと、12か月の時点で形成される父子間のアタッチメントの質が2年後のアタッチメント関係の安定性を予測することを明らかにしている。また、父親とのアタッチメントの安定性と子どもの知的発達・性別役割・パーソナリティの発達との関連、20か月の乳児の適応行動が、父親の態度、感受性の質的な特性から影響を受けることが報告されている。さらに父親とのアタッチメントが子どもの社会的スキルとの関連を検討している研究もあり、子どもの父親へのアタッチメントが母親へのアタッチメントにはない特異的な影響を及ぼすことも想定される(数井・遠藤, 2005)。

ところで、永井(2017)は、アタッチメントはその後の人生における情動抑制や対人関係における情動処理、対人行動など対人相互作用の様々な側面に影響するとし、「援助要請」をその一つとして研究している。永井(2013)によると、援助要請行動とは、「個人が問題を抱え、それを自身の力で解決できない場合に、必要に応じて他者に援助を求める重要な対処方略である」と定義されている。現在、援助要請は、困難を抱えても自身での問題解決を試み、どうしても解決が困難な場合に援助要請を行う「援助要請自立型」、困難を抱えた際に十分な自助努力を行わずに安易に援助要請を行う「援助要請過剰型」、困難な問題を抱えても一貫して援助要請を回避する「援助要請回避型」の3つのスタイルに分類される。永井・桑原(2011)の大学生における援助要請スタイルと恋人とのアタッチメントスタイルとの関連を明らかにした研究において、アタッチメント不安定型は、過剰な援助要請と回避的な援助要請と関連し、アタッチメント回避型は、自立的な援助要請と過剰な援助要請を抑制し、回避的な援助要請に関連していた。

本研究では、子どもの生涯発達に影響を与える母親以外のアタッチメント対象として母親に次ぐ第二の養育者としてあげられる父親に焦点を当てた。青年期に

おいて、問題解決への重要な対処方略である援助要請が父親とのアタッチメントと関連があると考え、本研究では、大学生の父親へのアタッチメントスタイルを測定し、援助要請スタイル(社会性)にどのような影響を及ぼすか明らかにすることを目的とした。なお、本研究では、日本語の「愛着」という言葉には「慣れ親しんだものに特別な思い入れがある」という意味を含み、好きといったプラスの感情と結びついた言葉といわれ、近年では多くの研究者が、アタッチメントと愛着を区別して使用していることから、先行研究で「愛着」と表現されている場合においても定義を越えない範囲で「アタッチメント」という表現を用いる。

方 法

調査対象者 千葉県内私立大学在学学生のうち2016年6月6日～2016年6月23日の講義受講者325名に質問紙を配布し、279名のデータを回収した(回収率85.8%)。そのうち性別・家族構成の無記入、援助要請スタイルが群分けすることができないデータを除外し、最終的に246名(男性119名女性127名)平均年齢19.5歳(18～55歳)のデータを有効回答として分析を行った。

質問項目 質問項目に(a)援助要請尺度(永井, 2013)、(b)アタッチメントスタイル尺度一般他者版(以後、ECR-GOと省略する)(中尾, 2004)、(c)アタッチメント機能尺度(山口, 2009)を使用した。また性別、年齢、家族構成、離別の有無、離別年齢を質問した。

(a)援助要請尺度 援助要請過剰型・回避型・自立型の3つの下位尺度12項目で構成され、(1)全く当てはまらない～(7)よく当てはまるの7件法で回答を求めた。

(b)ECR-GO「一般他者」を想定したアタッチメントスタイル尺度 一般他者をアタッチメント対象として測定される。見捨てられ不安と親密性の回避の2つの下位尺度30項目から構成され、(1)全く当てはまらない～(7)よく当てはまるの7件法で回答を求めた。本研究では父親とのアタッチメントスタイルを測定する為、「私は父親に見捨てられるのではないかと不安だ」のように既存の尺度項目の「人」を「父親」に変換して作成した。その際文章の意味を簡潔にするために、項目24「私は誰かと付き合っていないと、何となく不安な気持ちになる」を「私は父親と良い関係でいられないと、なんとなく不安な気持ちになる」項目26「私は、私がそばに居て欲しい人が望むくらいに人がそばにいてくれないと、イライラしてしまう」を「私は父親がそばにいないとイライラしてしまう」の2項目の文章を修正した。

(c)アタッチメント機能尺度 現在想像するアタッチメント対象が父親か母親か分類する為、各質問項目において父親と母親のどちらを想像したか、(1)母親(2)どちらかという母親(3)どちらも(4)どちらかという

父親(5)父親の5件法で15項目の回答を求めた。下位尺度得点の平均値が3未満の場合は母親型、3の場合は両親型、3より大きい場合は父親型と操作的に定義し、アタッチメント対象を分類した。

分析方法 (a)援助要請スタイル 永井 (2008) の援助要請尺度の得点の集計方法を基に、3つの援助要請スタイルのうち、最も高い得点であることかつ少なくとも取りうる得点範囲の中央値以上であることを基準に「過剰型」「回避型」「自立型」の3つに群分けを行った。得点と同じで群分けすることが出来ない場合は分析から除外した。(b) ECR-GO アタッチメントスタイルの分類は中尾・加藤 (2004) の方法に基づき、加藤(1998)による2次元4分類アタッチメントスタイルにおいて分類を行い、自己感と他者感の2次尺度得点を算出した。自己感・他者感ともにポジティブな「安定型」、自己感がポジティブであるが他者感がネガティブな「拒絶型」、自己感がネガティブで他者感がポジティブな「とらわれ型」、自己感・他者感共にネガティブな「恐れ型」の4つに分類された。(c)アタッチメント機能尺度 青年期以降の近接性の維持・安全な避難所・安全基地に関する期待を測定するアタッチメント機能尺度として開発されたが、本研究では参加者のアタッチメント対象を数値として測定するために下位尺度得点の平均値が3未満の場合は母親型、3の場合は両親型、3より大きい場合は父親型の3つに分類を行った。

倫理的配慮 調査前のインフォームドコンセントとして、調査協力は任意であり参加しない場合でも不利益を被ることは一切ないこと、データは厳重に保管し調査終了後は破棄されることの説明を行った。調査協力への同意は質問紙への記入・回収を以て同意とみなした。

結 果

本研究では帰無仮説の棄却を5%水準に設定して分析を行った。まず、人口統計学的データと援助要請スタイルの分類、父親へのアタッチメントスタイルの分類、アタッチメント対象として想起する対象の分類についての男女差を χ^2 検定によって統計的に算出した (Table1)。その結果、援助要請スタイルにおいて有意な男女の人数比率の偏りが見られた ($\chi^2=12.17, df=2, p=.002$)。続いて、援助要請スタイルと父親へのアタッチメントスタイルの分布を比較するために男女を含めた全体、男性、女性をそれぞれ χ^2 検定で検討した。その結果、全体 ($\chi^2=8.792, df=6, p=.186$)、男性 ($\chi^2=9.995, df=6, p=.125$)、女性 ($\chi^2=10.64, df=6, p=.100$) で有意な人数比率の偏りは見られなかった。しかし、残差分析の結果を参照すると、男女を含む大学生参加者において、父親へのアタッチメントスタイル安定型における援助要請スタイル自立

Table1 人口統計学的変数および各尺度得点から分類したカテゴリ分布の男女差

| 家族構成 | 男性 | | 女性 | | 全体 | p |
|-------------|----------|-----------|-----------|-----------|----|-------|
| | N(%) | N(%) | N(%) | N(%) | | |
| 両親 | 98(82.3) | 105(82.7) | 203(82.5) | | | 0.648 |
| 母子家庭 | 14(11.8) | 14(11.0) | 28(11.3) | | | |
| 父子家庭 | 3(2.5) | 6(4.7) | 9(3.7) | | | |
| 一人暮らし | 4(3.4) | 2(1.6) | 6(2.4) | | | |
| 離別の有無 | なし | 93(78.8) | 101(80.2) | 194(79.5) | | 0.308 |
| 離婚 | 14(11.9) | 21(16.7) | 35(14.3) | | | |
| 死別 | 6(5.1) | 2(1.6) | 8(3.3) | | | |
| 別居 | 3(2.5) | 1(0.8) | 4(1.6) | | | |
| その他 | 2(1.7) | 1(0.8) | 3(1.2) | | | |
| 援助要請スタイル | 過剰型 | 17(16.2) | 44(37.0) | 61(27.2) | | 0.002 |
| | 回避型 | 23(21.9) | 19(16.0) | 42(18.8) | | |
| | 自立型 | 65(61.9) | 56(47.1) | 121(54.0) | | |
| アタッチメントスタイル | 安定型 | 30(25.0) | 36(28.6) | 66(26.8) | | 0.597 |
| | 恐れ型 | 19(15.8) | 26(20.6) | 45(18.7) | | |
| | 拒絶型 | 41(34.2) | 36(28.6) | 77(31.3) | | |
| | とらわれ型 | 30(25.0) | 28(22.2) | 58(23.6) | | |
| アタッチメント対象 | 母親型 | 79(65.8) | 110(86.6) | 189(76.5) | | 0.001 |
| | 父親型 | 17(14.2) | 8(6.3) | 25(10.1) | | |
| | 両親型 | 24(20.0) | 9(7.1) | 33(13.4) | | |

統計学的検定はPearsonの χ^2 乗検定による

Table2 父親へのスタイルとアタッチメント援助要請スタイルの分布全体

| 援助要請スタイル | 安定型 | 恐れ型 | 拒絶型 | とらわれ型 | 合計 | p |
|----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------|
| | N(%) | N(%) | N(%) | N(%) | | |
| 過剰型 | 15 (24.6) | 12 (30.0) | 23 (32.4) | 11 (21.6) | 61 (27.4) | .186 |
| 回避型 | 6 (9.8) | 7 (17.5) | 15 (21.1) | 14 (27.5) | 42 (18.8) | |
| 自立型 | 40 (65.6) | 21 (52.5) | 33 (46.5) | 26 (51.6) | 120 (53.8) | |
| 合計 | 61 (100) | 40 (100) | 71 (100) | 51 (100) | 223 | |

統計学的検定はPearsonの χ^2 乗検定による

注) 統計的仮説検定として残差分析を行った結果、アタッチメントスタイル安定型における援助要請スタイル自立型が占める割合は有意に高く、アタッチメントスタイル安定型における援助要請スタイル回避型が占める割合は有意に低かった

Table3 父親へのアタッチメントスタイル援助要請スタイルの分布 男性

| 援助要請スタイル | 安定型 | 恐れ型 | 拒絶型 | とらわれ型 | 合計 | p |
|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|------|
| | N(%) | N(%) | N(%) | N(%) | | |
| 過剰型 | 1 (4.0) | 4 (25.0) | 10(26.3) | 2(7.7) | 17 (16.2) | .125 |
| 回避型 | 5(20.0) | 2(12.5) | 10(26.3) | 6(23.1) | 23 (21.4) | |
| 自立型 | 19(76.0) | 10(62.5) | 18(47.4) | 18(69.2) | 65 (61.9) | |
| 合計 | 25(100) | 16(100) | 38 (100) | 26(100) | 105 | |

統計学的検定はPearsonの χ^2 検定による

注) 統計的仮説検定として残差分析を行った結果、アタッチメントスタイル拒絶型における援助要請スタイル過剰型の割合は有意に高く、アタッチメントスタイル拒絶型における援助要請スタイル自立型は有意に低かった。

Table4 父親へのアタッチメントスタイル援助要請スタイルの分布 女性

| 援助要請スタイル | 安定型 | 恐れ型 | 拒絶型 | とらわれ型 | 合計 | p |
|----------|-----------|----------|----------|---------|-----------|------|
| | N(%) | N(%) | N(%) | N(%) | | |
| 過剰型 | 14 (38.9) | 8(33.3) | 13(39.4) | 9(36.0) | 44 (37.3) | .100 |
| 回避型 | 1(2.8) | 5(20.8) | 5(15.2) | 8(32.0) | 19 (16.1) | |
| 自立型 | 21(58.3) | 11(45.8) | 15(45.5) | 8(32.0) | 55 (46.6) | |
| 合計 | 36 (100) | 24(100) | 33 (100) | 25(100) | 118 | |

統計学的検定はPearsonの χ^2 乗検定による

注) 統計的残差分析を行った結果、アタッチメントスタイル安定型における援助要請スタイル回避型が占める割合は有意に低く、アタッチメントスタイルとらわれ型における援助要請スタイル回避型が占める割合は有意に高い。

型が占める割合は有意に高く、援助要請スタイル回避型が占める割合は有意に低かった。男性参加者の父親へのアタッチメントスタイル拒絶型における援助要請スタイル過剰型の割合は有意に高く、アタッチメントスタイル拒絶型における援助要請スタイル自立型は有意に低かった。女性参加者の父親へのアタッチメントスタイル安定型における援助要請スタイル回避型が占める割合は有意に低く、アタッチメントスタイルとらわれ型における援助要請スタイル回避型が占める割合が有意に高かった (Table 2・3・4)。

考 察

本研究では、大学生の父親へのアタッチメントスタイルが、援助要請とどのような関連があるかを明らかにすることが目的であった。まず、大学生の父親へのアタッチメントスタイルを測定した。従来、アタッチメントスタイル安定型は、アタッチメント対象との親密な関係を大切に、個人的な自律性を失うことなく親しい関係を維持する能力があると考えられている。また、拒絶型は「親密な関係の重要性を過小評価する、情動性が制限されていて独立性と自律性を重視する」、とらわれ型は「親密な関係にのめり込み、自分の幸福感を持つうえで他人の受容に依存している」、恐れ型は「拒絶されることへの恐怖感、自身の安全感や他者への不信感から親しい関係を回避する」と考えられている。Table 1に示したように、本研究における大学生参加者の父親へのアタッチメントスタイルは安定型が26.8%、拒絶型が31.3%、とらわれ型が23.5%、恐れ型が18.2%に分布し、男女差は見られなかった。青年期の親子関係でかつ父親をアタッチメント対象とした先行研究が少ないので比較はできないが、欧米でのアタッチメントの年齢の差異を扱った横断的なあるいは縦断的な研究が示す知見からは、加齢とともに徐々に拒絶型の比率が高まっていくとの指摘もあり(遠藤, 2010)、現在の大学生年代の父親へのアタッチメントスタイルとして妥当な結果と考えられる。また、アタッチメント対象についても、男女差を検討したが、男性参加者が父親をアタッチメント対象と考えている比率は、14.2%、両親ともをアタッチメント対象とイメージしている比率は20.0%に及んだ。一方で、女性参加者は、86.6%の参加者がアタッチメント対象として母親をイメージしており、男性と比べて有意に父親、あるいは両親をアタッチメント対象として考えている割合が低かった。以上の結果も、従来、調査されてこなかったもので、今後、その実態についても検討がなされるべきではあるが、一般に、女性が母親をモデルとし、男性において、父親を安全基地や安心な避難所としてイメージする割合が多いのは妥当な結果と考えられる。

続いて、アタッチメントスタイルと援助要請スタイル

の人数分布の偏りを検討するために行った残差分析の結果から、男女を含めた大学生参加者全体における父親とのアタッチメントスタイル安定型は援助要請自立型の占める割合が有意に高く、回避型の占める割合が有意に低かった (Table 2)。以上のことから、本研究で父親との現在の関わりから測定されるアタッチメントスタイルが安定していると、自分が助けを求めたときには援助してくれるという安定した、父親に対する内的作業モデルが構築されていることが考えられた。不適切な養育を受けて健全なアタッチメント関係を築くことができなかつた場合、生涯を通して、精神疾患や反社会的な問題行動へのリスクが高まることが指摘され、北川 (2008) は、そのリスクを軽減する要因として、3つの条件を挙げた。1つめは「過去のアタッチメント経験に基づく内的作業モデル」があげられる。子どもは、誕生後から繰り返されるアタッチメント欲求が高まる場面で、養育者がどのような応答をしてくれたかという主観的経験を通して、アタッチメント対象の応答性についての主観的確信を相補的に形成する。2つめは「現在のアタッチメント対象との関わり」である。現在のアタッチメント対象との間で率直なコミュニケーションができる場合、現在降りかかるストレスへの反応が緩和される。3つめは「複数存在するアタッチメント対象」である。Bowlbyは、アタッチメント対象者との分離経験が少ないほど安心な状態と考えたが、母親の他に持続的に子どもの分離に関わる大人がいない場合には、母親との分離時にそのストレスを緩和してくれる大人がいないことになり子どもの苦痛は大きくなる。一方、複数名の大人が持続的子どもの養育に関わっている場合、子どもは複数のアタッチメント対象を持つことになり、1人のアタッチメント対象からの分離や喪失への反応を緩和する要因となる。つまり、母親以外のアタッチメント対象の重要性とその対象との過去経験、現在の関係性は分離に対する反応を緩和させるために重要であると考えられている。本研究の参加者の多くは、アタッチメント対象を母親としていたが、男女差があるものの一定数が、父親、あるいは両親を安全基地、安心な避難所としてイメージしていた。さらに、父親へのアタッチメントスタイルが安定型であると現在の問題解決の対処戦略としての援助要請が自立型になりやすいという事実は注目に値するであろう。

永井 (2013) は大学生を対象にしたアタッチメントスタイルに基づいた援助要請及び悩み方の個人差を検討した研究において、アタッチメント安定型は援助要請スタイル過剰型と自立型が高く回避型が低いこと、アタッチメント拒絶型は援助要請スタイル自立型と過剰型が低く回避型が高いこと、アタッチメント恐れ型は援助要請スタイル自立型と過剰型が低く回避型が高いこと、アタッチメントスタイルとらわれ型は援助要

請過剰型が高く回避型が低いことを明らかにしている。本研究におけるアタッチメントスタイル安定型以外のスタイルを示す参加者では永井 (2013) と異なり、アタッチメントスタイル拒絶型、おそれ型・とらわれ型においては援助要請スタイルへの影響は見られなかった。これは前述した「複数存在するアタッチメント対象」が存在した為ではないだろうか。父親とのアタッチメントスタイルが拒絶型・おそれ型・とらわれ型であったとしても、他のアタッチメント対象の存在によって援助要請スタイルが変化するため、父親との安定型以外のアタッチメントスタイルと援助要請スタイルに関連が見られなかったと考えることができる。また、他のアタッチメント対象で拒絶型・おそれ型・とらわれ型であったとしても父親とのアタッチメントスタイルが安定型であれば、援助要請スタイル自立型が高くなり、回避型が低くなることも考えられる。

今後の課題と発展

本研究では、大学生の父親へのアタッチメントスタイルの分布を測定し、アタッチメントスタイルが援助要請スタイル及ぼす影響を明らかにした。しかし、援助要請スタイルには、援助を行う側の性別や関係性(竹ヶ原, 2014)、ソーシャルサポートの量や質、悩みの経験や悩み方(永井, 2013)など関連する要因が多く想定される。また、前述のように、父親以外のアタッチメント対象が父親へのアタッチメントスタイルとどのように交絡し、援助要請スタイルと関連しているかも明らかにできなかった。今後、これらの要因を統制し、父親へのアタッチメントが影響することを精査することが課題である。また、今回はアタッチメントの形成に問題を抱えていないことを前提に論じているが、DeKlyen & Greenberg(2008)は、幼少期のアタッチメントの問題は、(a)情動制御プロセスへのネガティブな影響、(b)特異な行動パターン、(c)社会的認知や対人的情報処理に歪んだバイアスをもたらす、(d)他者との関わりへの動機付けの低下を招来するなどによって後の様々な不適応事態につながる可能性が論じられている。このような視点から、父親とのアタッチメントは生涯発達に関わる重要なものであることを踏まえてアタッチメントが生涯を通して、個人の情動制御に及

ぼす影響や行動パターン、認知処理についても研究を行う意義があると考えられる。

謝 辞

本研究の今後の発展として、根津克己准教授からアタッチメントスタイルと感情抑制についてのアドバイスを頂きました。根津准教授および調査に参加していただきましたみなさまに心より感謝申し上げます。

引用文献

- 遠藤利彦 (2010). アタッチメント理論の現在—生涯発達と臨床実践の視座からのその行方を占う— 教育心理学年報 49, 150-161
- 加藤和生 (1998). Bartholomewらの4分類アタッチメントスタイル尺度(RQ)の日本語版の作成. 認知体験過程研究 7, 41-50
- 数井みゆき・遠藤利彦 (2005). アタッチメント—生涯にわたる絆— ミネルヴァ書房
- 北川恵 (2008). アタッチメントと分離, 喪失—子どもの虐待とネグレクト 10, 278-284
- 北川恵 (2013). アタッチメント理論に基づく親子関係支援の基礎と臨床の橋渡し— 発達心理学研究 24, 439-448
- 永井智 (2013). アタッチメント対象に基づいた援助要請および悩み方の個人差の検討— 教育心理学会第55回総会抄録466
- 永井智 (2013). 援助要請スタイル尺度の作成—横断研究による実際の援助行動との関連から— 教育心理学研究 61, 44-55
- 中尾達馬・加藤和生 (2004). “一般他者”を想定したアタッチメントスタイル尺度の信頼性と妥当性の検討— 九州大学心理学研究, 5, 19-27.
- 尾形和男 (2011). 父親の心理学— 北大路書房
- 竹ヶ原靖子 (2014). 援助要請行動の研究動向と今後の展望—援助要請者と援助者の相互作用の観点から— 東大学大学院研究科研究年報 62, 167-184
- 山口正寛 (2009). アタッチメント尺度(Attachment-Function Scale)作成の試み— パーソナリティ研究 17, 157-167

— 2018.1.30受稿, 2018.3.2受理 —

The Father-Child Attachment Relationship: The Influence of Help-Seeking style in College Students

Himeno SHIMAZAKI (*Graduate School of Psychology, Tokyo Seitoku University*)

Haruki KIKUCHI (*Department of Applied Psychology, Tokyo Seitoku University*)

This study reconsidered influence of attachment style of father-child on helping-seeking style in adolescence. 246 college students were asked to respond to a series of questions, including ECR-GO for father, Attachment-Function Scale and Help-seeking scale for an index. Attachment 4 style (attachment secure, attachment dismissing, attachment preoccupied, attachment fearful) were classified by ECR-GO score. Moreover Help seeking 3 style (self-directed help seeking, excessive help seeking, avoidant help seeking) were classified by Help-seeking score. The difference between the proportion of the attachment style and help seeking was verified using residual analysis. As a result, attachment secure showed significantly high to self-directed help seeking and significantly low to avoidant help seeking. These results indicated that attachment style of father-child influences self-directed help seeking.

Key words: Attachment style, Help seeking, Father-Child, ECR-GO, attachment secure.

Bulletin of Clinical Psychology, Tokyo Seitoku University
2018, Vol. 18, pp. 152-157